

プロローグ

「行きましょう。こんなチャンスめったにないワ。」妻の一声で、CVV 台湾旅行に夫婦そろって参加することになった。妻は 1980 年の新婚旅行からほぼ四半世紀ぶりの、私には 4 度目の渡台となる。

今回の旅行では台湾の大学で教鞭をとっておられる A.H 先生(大阪大学名誉教授)に、嘉南平野灌漑施設見学にお出でになりませんかとお誘いした。A.H 先生はご都合が悪くなられ、参加いただけなかったのだが、訪問先とか台湾の現状について若干のアドバイスを下さり、『図説台湾の歴史』を是非読みなさいと仰ったので観光ガイドブックとあわせ持参した。台湾では台湾の歴史を研究することは許されなかった、と記すこの本は、平明かつ抑制のきいた、客観性を保持する的確な表現で、台湾の歴史を説き明かす。

5月13日(日)

朝、関空の団体待合いに集まった真面目そうな CVV メンバーの一団をながめていて、ふと、新婚旅行を思い出した。台北のホテルに着いた二人を迎えたのは、一人ずつ女性をあてがわれニヤつく日本人男性の群れであった。買春パックスツアー。「お前はいい女が当たったな」とでも言わんばかりの男ども。女性が 3 名となる予定であった今回の CVV 旅行団、男性諸氏 19 名の紅一点を見つめる目は優しく紳士的である。

CVV 台湾旅行の目的は台湾新幹線の試乗、八田與一技師墓参、新装なった故宮博物館と台北国際金融センター「台北 101」の見学、等々である。

EVA(長栄)航空機はほぼ定時に桃園国際空港に着陸、通関もスムーズに終えて大型観光バスに乗り換え、20 分程で台湾高速鉄道の桃園駅に到着。バス内で旅行社(協運旅行社)の呉美聰氏の挨拶があり、スケジュール表、観光地図、台日友好バッジ、等々を受け取る。同社の台湾観光パンフをみると「雨夜花」、「何日君再来」、「月見の歌(アミ族民謡)」の歌詞とか、簡単な中国語、花言葉があった。なんとも古めかしい。

桃園駅は銀白色に輝く瀟洒で超モダンな駅舎であるが、意外にも利用者は少なく、ガランとしていて子供が数人遊び回っていた。駅周辺も開発途上にみえる。出発までの約 1 時間余、駅舎をのんびりと眺める。待ちくたびれた頃、呉美聰氏が地下一階の待合いロビーへと誘導、プラットホームは地下二階である。改札前に田中副団長が切符の投入方向について注意喚起。印字面を下にするようにとのこと。これはフランスが運行システムを受注した結果だそうである。田中氏は日仏の受注合戦と台湾政府対応の不満も色々。切符をみると中国語で切符の投入方向が書いてあるのだが、英語の説明はない。(表：請將磁條面朝上挿入票口、裏：通過票口時此面請向上)

日本の新幹線のぞみに使われている 700 系を改良した 700T 型車両が音もなくホームへ。われわれは先頭車両に乗り込む。広く明るい車内、入口附近に大型荷物置き場。最前列の 1A に坐る。音もなく発車 16:41。揺れはのぞみ並か。電光掲示板には時々、列車速度とか天気予報等を示す。18:08 台南着。運転手はフランス人?であった。台南駅周辺も開発途上。また大型観光バスに乗り換えて、目的の夕食をとる台南駅近くのレストラン・台南大飯店まで約 40 分もかかる。よくあんな辺鄙なところに新幹線停車駅を造ったものだと驚く。夕食は美味しい広東料理。安価なバック旅行だと肉類がほとんどない冷めた料理が出てガッカリすることもあるのだが、今回はどのレストランの食事でも平均以上が大変良かった。酒類は別勘定でビールが大瓶 1 本 120 元(台湾ドル)、私は紹興酒を注文。食後、宿泊先の台南劍橋大飯店へ移動。田中氏の友人の案内で 21:30 頃赤嵌楼を見学し、その後、屋台(といっても屋根付きのオープンレストラン)で八寶冰等の氷菓を食する。なかなか美味しい。

ホテルの台南大飯店では部屋でインターネット接続ができたので CVV 某氏に添付ファイル付きで無事到着を伝える。このホテルには 2 泊。枕銭 50 元。

5月14日(月)

天気：晴れ 7:30 バイキング形式の朝食を摂る。中国粥を選ぶ。8:30 大型観光バスでホテル出発。1 時間

後、高速道路に入る。途中、田中氏がレジュメをもとに嘉南大圳、烏山頭ダムの概要説明。9:50頃、右手に八田與一技師が計画、建設した烏山頭堰堤がみえる。周辺は烏山頭風景区となっている。台湾省嘉南農田水利会烏山頭区管理処の資料室で20分程の嘉南農田水利会DVDを見たのち質疑応答。

烏山頭ダムは曾文溪の支流である官田溪から導水し、珊瑚状の谷を、コンクリート造コアをもつ土堰堤で締め切り貯水池とした。集水面積：58km²、有効貯水量：15,415万8千m³(現在：8,376万m³)、堤長：1,273m、高さ：56m、堤頂幅：9m、堤底幅：303m、計画取水量：56m³/sec、最大溢水量：1,500m³/sec。工期：1920(民国9)年1月～1930(同19)年5月、総工費：5,413万円。セミハイドリックフィルダム(Semi-hydraulic filled earth dam) 1973年に貯水容量5.8億m³の曾文水庫が完成し、その水も受ける。

現地見学はまず余水吐を見て、堰堤上を歩き、八田與一技師のお墓に到着。北村団長が献花し、全員でお墓参り。手前から「嘉南大圳設計者 八田與一氏像」、「八田與一・外代樹之墓」、その後方に「技師中島力男氏分髪」の碑が立つ。再度、バスに乗って八田與一記念館へ行き、ここでは八田與一のDVDを見る。この記念館は収蔵品が少なく、やや期待外れ。八田技師が作成した設計図等は台南市内の水利組合事務所にあるとのこと。

八田與一技師が土木の分野でよく知られるようになったのは、古川勝三氏の著書『台湾を愛した日本人』(平成元年刊)が土木学会著作賞を得て以来であろう。その序文で高橋裕・東京大学名誉教授は「いま国際化の波の中で、多数の日本人が世界各国で働いている。その場合、最も重要なことは、現地の一般庶民の幸せを願うことであり、現地で慕われる業績を積むことである。」と記している。明治28年4月17日締結の下関条約により、日本の植民地となった台湾は、短期の軍政ののち民政移行となる。明治31年の児玉源太郎総督、後藤新平民政長官となり、後藤による旧慣調査に基づく科学的行政施策が実りのときを迎え治安が良好となった時期、明治43年に台湾総督府へ勤めるのである。当初、衛生工事を担当し台南市上水道工事に携わるが、大正5年に桃園碑圳の設計・監督を行う。大正7年に嘉南平原を精力的に調査し烏山頭水庫(官田ダム)を核とする嘉南平野一円への大灌漑計画を立案する。烏山頭水庫はダム流域に降った2,660mmの降水を貯留できる容量をもつ。この貯留量は最大取水量で32日間放流することができる。現地調査により台湾の人々の水利慣行、労働形態も知悉したであろう八田の計画は十二分に説得力をもっていたことと思われる。なお、このダム計画では当時のダム工学の権威、佐野藤次郎が事前調査をしているので、佐野の助言によりセミハイドリックフィルダムとなった可能性がある。

次に奇美博物館を見学。世界最大のABS製造会社である奇美実業の董事長である許文龍氏が蒐集した絵画、彫塑、兵器、楽器、古文物、自然史(剥製)を無料展示している。日本語を流暢に話す白髪の奇美博物館顧問・石榮堯氏が案内して下さる。館内は、月曜日が本来休館日のため、展示品の彫塑を素材として美術学生がキャンパスに向かっているだけ。石顧問によれば、普通の人は作品を購入するとき誰の作かと聞くだろうが、許文龍氏は己の好み、審美眼だけで購入するとのこと。系統立ったコレクションに感心させられる。楽器部門では自動演奏楽器の実演をして下さったが、楽しい音色である。圧巻は動物剥製のコレクションであろう。大型動物から小鳥まで、多くの精巧な剥製が所狭しと展示されており、夜中に一人で迷い込んだらギョッとすること受け合い。

観覧後、一階のティールームで飲み物とお菓子が出る。また、音楽CD(PIANO TRIO 1)とDVD(明琴名曲之夜)と奇美博物館の案内図録をいただいた。あとで知ったのだが全て奇美博物館館長・郭玲玲女史のご好意とのこと。図録は数が少なかったのを田中氏が妻に手渡してくれたのであるが、妻が隣に坐っていた人に差し上げた。

奇美博物館では書籍を三冊戴いた。李俊峰著・石榮堯訳『解説 二二八』奇美文化基金会贈呈と許文龍著『台湾の歴史』2003.12、および洪文慶著・石榮堯校正『僕の一生(大正生まれの政治犯が語る)』奇美文化基金会後援、2007.03である。許文龍氏は李登輝元総統と親しく、日本が台湾を植民地としていた時代に生まれ育ち、日本語も堪能という。三著を読み改めて、二二八記念公園へ行くべきだとのA.H先生の助言の意味がよくわかった。

桃山餐厅での夕食は今回の旅行の一番大きな目的である八田與一技師墓参を無事終えたこと、また台湾を

よく知る船本洋治・鹿島建設（株）台湾総代表と高橋芳明・同社台湾営業所・副所長が同席されたことで大いに盛り上がった。船本氏は笑らわん殿下であったが、文系の人かと最初思ったほど、その知識と物言いに大人の風格を感じた。両氏からは夕食時の銘酒ワインと帰り際には名産菓子の手土産をいただいた。夕食の後、蛇のショーを見に行こうと田中氏が皆を誘って下さったが、私どもは遠慮した。

5月15日(火)

天気：快晴 7:00 今日は洋食を摂る。8:00 ホテル出発。9:20 北回帰線標誌を見学。北村団長曰く、こういった意味のある線を跨ぐことに意義がある！ 北回帰線標誌は北回帰線の移動にともない、造り替えられていて、少しずつ位置がずれる。12:40 昼食のため康華大飯店着、13:40 同所出発。14:10 故宮博物館地下一階のロビー着。16:30 まで自由見学。観覧料は団体割引で大人 100 台湾ドル。館内マップを手にまず玉器「翠玉白菜」のある 3 階へ。この清代に作られた翡翠の彫刻は白菜にギリギリの止まっているもので、まさに宝物。あとは館内マップに図のある代表的展示品を巡って見学。書画、印章、陶磁器、銅器、古典籍・文献、珍宝、等々の清王朝コレクションが適度な広さの館内にうまく配列されていた。さすがに疲れたので、2 階の喫茶室でコーヒーを飲む。あつと言う間に時間が経ち、集合場所の地階のロビーに行き、ミュージアムショップで切手セット「故宮之美」250 元等をお土産として購入。

バスに乗り今度は 101 ビル。熊谷組を中心とする JV が建設を請け負ったもので、地下 5 階、地上 101 階、高さ 508m は世界最高層建築物。5 階展望台入口で各自一人 300 元の切符を渡され、89 階にある屋内展望台まで高速エレベータで移動。受付嬢がパンチャーで切符に穴を開けてくれるのが楽しい。エレベータ内では経過秒が表示される。上昇時が 37 秒、下降時は 50 秒を超える。展望台で外の景色を見るも、眼下に雲がたなびくビルとのことであつたが、本日は雲なく曇りとあつてどんよりとしている。売店に記念品も売られていたが店員に商売気なし。一見の価値があるのは風による振動対策として設けられた、ケーブルで吊った直径 5.5m、重さ 660 トンの巨大な TMD (チューンドマスダンパー)。金色に塗装されており、何やら神秘的であつた。梅子餐厅で夕食後、ホテルの台北三徳大飯店へ。

5月16日(水)

天気：快晴 7:00 朝食、8:00 出発。出発時にバスに添乗しようとした台湾女性を北村団長が下車させ、旅行社の呉美聰氏との間で一悶着。最初は龍山寺へ。台北で最古の仏教寺院であるが、他の神様も祀られている観光名所。参詣者も含めた読経の声が素晴らしい。入口では五体倒置をする女性も。蠟燭大 2 本を購入し、家内安全を祈る。ついで中正紀念堂へ移動。正面に蒋介石の大きな座像があり、業績を讃える写真パネル、遺品の展示。二二八記念公園で私ども二人は台湾の友人と会うため台湾博物館前に移動。台湾省政府を退職した友人は現役時と違い好々爺風であつた。友人も同席させていただいて上海餃子で有名な鼎泰豊餐厅で夕食。ここはいつも一杯で、予約もできないそう。レストランを出発し、一路桃園中正国際空港へ。

エピローグ

帰国後、妻にこのレポートを合作することになったから、何か書いて欲しいと頼んだ。読むと食事の席での雑談・人物観察満載ではあるが、見学旅行レポートになっていない。少しだけ紹介する。初対面の方も多かつたけれど、食事の席で色々な話題があつて楽しかつた。「定年後に妻とどう付き合うか?」、「妻ともっと仲良くするには?」、「浮気したからな〜、僕は・・・」、滅多に聞けない「夫」達の本音ともつかぬお喋り。手術して声が不自由な方が、ゆったりと旅行を楽しんでおられる様子が、実に見事だなあと感心する、等々。よって、ボツ。野帳のメモを頼りに一人でまとめた次第。

あつと云う間に過ぎた 3 泊 4 日の CVV 台湾旅行であつた。台南、台北の古い市街にみられる派手派手のネオンと雑踏、台湾高速鉄道駅舎の超モダン、故宮博物館と中正紀念堂のたたずまい、そして「嘉南大圳設計者 八田與一氏像」、等々・・・、それから奇美博物館で戴いた三冊の書籍と『図説台湾の歴史』。

台湾の歴史に驚くほど無知であつたこと、偏った台湾観をもっていたことが自覚でき、現在台湾の動きが少し理解できるようになったのは予期せぬ収穫であつた。

最後になつたが、北村団長以下、この企画を立案・実行して下さった世話役の方々に深く感謝申し上げたい。